「笹川杯作文コンクール 2012」～中国語で応募～ 第 4 回（9 月分）優秀賞作品

※原文に忠実に和訳しました。

※個人名の掲載については、本人の了承を得ています。

国の関係を越える友情

広東省 戴麗雯

机には 2 枚の写真が飾ってある。1 枚は両親との記念写真、もう 1 枚は莱拉が 1 人で写ったものだ。白いマキシスカートの彼女はすっきりと上品で、笑顔が輝いている。その写真の右下には「みはらしの丘にて」の文字がある。

莱拉のフルネームは「織田莱拉(注)」。北京を旅行している時に知り合った。彼女は全くの日本人で、慶応大学に合格した年、中国に遊びに来ていたのだ。初めて会った時、私は頑張って下手な日本語で話しかけたが、驚くことに彼女の口からは流暢な標準中国語が出て来た。10 歳から中国語を学んでいるので、簡単な交流は問題ないとのことだった。別れる時、電話番号とメールアドレスを交換して、また連絡を取り合おうと約束した。

率直に言うと、旅行から帰って以降、私はそのことをあまり気に留めず、大事な 3 年次の準備に集中していた。月次試験の前の週、彼女から電話が来て驚いた。やわらかな声が聞こえたが、ぴんと来るものがなく、2 ヶ月前の記憶を辿るのに暫く時間がかかってしまった。

莱拉は、中国に来て初めて知り合ったのが私なので、この友情をとても大事にしているという。私は、そんなことを全く気に掛けていなかった自分が恥ずかしく思えた。それ以来、毎週土曜日には、忙しい時でも彼女と話すことにしている。

莱拉とのおしゃべりはとても楽しい。大学生活のあれこれを聞くといつも夢中になって時間を忘れてしまっていた。

私たちの間にあまり摩擦がないのは、だいたい彼女がいつでも譲歩してくれるからである。3 年次は今迄で最悪の時期だった。いつも点数のランキングが気になって、神経が常に張り詰めており、いつ切れるか分からない程だった。ある模擬試験では、成績が良くなかったので、先生と親に絞られる破目になってしまった。そのストレスで、彼女と話している時、私はつい失態を見せてしまった。彼女がある話題について言いかけた時、内心で押さえていた不満がついに爆発して、話の続きも聞かずにがしゃっと受話器を投げつけてしまったのだ。傍らで新聞を読んでいた父に聞こえるほどの音だったと思う。

それ以来、彼女のほうから電話をくれることはなくなった。ほとぼりが冷めると、私は後悔した。－明らかに自分の間違いなのに、他人に怒りをぶつけてしまったのだ。謝りたいと思ったが、私はどう話せば良いのか暫く分からなかった。高校受験前、彼女がメールをくれた。行間の端々から謝ろうとしているのが伝わってきた。彼女は、私にとってのその時間の重要性を理解していなかった、受験のストレスが重くのしかかっていることが分かっていなかったという。あれから電話をよこさなくなったのも、私に影響するのを恐れてのことだという。しかし、それが原因で友情が薄れてしまうのも嫌だったので、しばらくは我慢したがメールで説明することにしたのだという。文末に、「緊張しないで。試験が終わったら日本においで、みはらしの丘はきれいだよ」と添えられていた。

このメールに感動しなかったと言えば嘘になる。それをプリントアウトして引き出しにしまった。そして、毎週の電話は再開した。

今年の夏、日本政府が釣魚島の購入を発表し、同島の「国有化」手続きを開始した。このニュースは刺激的なものだった。率直に言えば、私は愛国者で、祖国の主権と領土保全に関心を持っている。それで莱拉にわざと冷たく接するようになった。それまでどおり電話は毎週していたが、態度をがらりと変えていたことには彼女も気

づいていたはずだ。2 人の会話はどんどん短くなり、週に 1 度の形式的な挨拶にまで変わり果ててしまった。「最近どう？」「まあまあ」「話がないなら、切るね」…うなってしまったことにも私は傷ついた。確かに知り合ってからわずか 1 年で、海も挟んでいれば、年も趣味も違う。それでもお互いを親友だと思って深い付き合いをしてきたのだ。それが今や、間に立ちこめる霧で相手が見えないのも同然。

高校に入って最初の週末に帰宅すると、母が小包を渡してくれた。東京からの荷物で、中身は大好きなテディベアだった。ベアの頭には中国語で「ごめんなさい」と書かれたラベルがあった。

もちろん莱拉がくれたものだとは分かっていたが、「ごめんなさい」の意味がすぐには分からなかった。実際、その溝を越えられずにいるのは私自身の問題であって、彼女に非はない。何を謝っているのだろう。疑問を抱えたまま電話してみた。政府が勝手に下した決定について、日本国民として申し訳ないのだと彼女は言った。中国の肩を持つつもりもないし、自国を責める気もないが、話し合いもせず実行してしまうのは確かに間違いだと。

形だけの挨拶のようにも聞こえたが、彼女の誠意は感じ取れた。返す言葉が見つからず、しばらく受話器を手で覆っていた。だいぶ経ってから、彼女の声がした。まだ友達でいられるかな、と。

私は深く息を吸い込んで、ずっと友達だよと答えた。話しながら私は「ごめんなさい」と書かれたラベルを折りたたみ、彼女の写真の裏にしまった。

（注）個人情報保護の観点から、作者と作品に描かれている本人が協議して決めた仮名。